

---

# 9つの鍵

陸奥九十九

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

9つの鍵

### 【Zコード】

N7150M

### 【作者名】

陸奥九十九

### 【あらすじ】

謎の力がはいった箱とその箱をあけるための不思議な9つの鍵を巡る物語です。

## まつめつの鐘（前書き）

よひしくおねがいします。誰かの心に残ればうれしいですね。

## はじまりの鐘

東京とある山奥<sup>ここから</sup>すべてが始まり、数多くの人々の運命を変えていくことになる。

日本全体を、いや世界全体を変えるほどの、そのなにかを軸に物語は進んでいく。始まりは2009年八月。

### 東京八王子原子力研究室

「博士、謎の強力なエネルギー反応を感じました」

7、8人ほどの人がいる研究室で時は動き出した。

「ふむ。今までにない協力な力が反応している。すぐに政府に連絡を」

博士と呼ばれている研究者がそう告げると、ほかの研究者達は一斉に仕事に取り掛かる。

一人は政府へ連絡に。一人は車を取りに。一人は研究機材を確認に。博士と呼ばれる者は不適な笑みを。

「いつたいなにがそこにあるんだ。これほどの反応・・・とにかく現場へ急ぐぞ」

不適な笑みは、驚きと興奮。研究者ならではの反応。研究したいこの力を！まずは目にしたい！！

自分の興奮を隠すこともせず、博士 楠木源一郎<sup>くすのきげんいちろう</sup>はその地へ先を急いだ。

### 東京 総理官邸

秘書と思わしき男性が足早に部屋を駆け巡る。

「総理！さきほど原子力研究所から連絡がありまして。高エネルギー反応を感知したとの知らせが届いております。」

定本国治。半年前に日本の総理になつた男。50代と觀れる顔には疲労も感じられず健康な感じが秘書からは見受けられた。

「結果はでているのか？現場に研究者は？」

淡々とそう告げると、出かける前であつたのであらう、途中だつた仕度を再開しはじめた。

「いえ結果はまだ・・・研究者達は現在、現場へ向かつているとのことです」

「なら私がどうすることもない。研究者たちの結論がでないことにはどうにもならんだろう。さあこれから大事な会議があるんだ。お前も仕度をしなさい」

ネクタイを締める動作の中でみるみる総理としての顔に勇ましく変化していた。だが次の一言で定本は動きを止める。

「ただ確実な情報が一つ。その感知された力は未知数のこと・・・ですでので早急に立ち入り禁止区域とし、機材を運んでほしいとのことです。」

秘書がそう告げると定本は考えだし1つの結論をだす。

「至急周りを立ち入り禁止区域に！未爆発のミサイルが発見されたとでもいい非難せざる。区域は研究者達にきき早急にだ。研究者達のサポートを！いわれた物を用意してやれ」

「警察にも協力を要請し早急の解決をするよつ伝える。なにかわかれり次第連絡を！それと赤星に現場へいくよう伝える。むこうの指揮は赤星にまかせる」  
一気に慌しくなつた官邸は事の重大さを誰もが感じ、それぞれの役割を果たすべく歩みだす。

謎のエネルギー反応発見から約1時間。研究者達はその謎の力の付近で待機していた。

まわりにはその力とれるものが何一つない。ただの山奥という風景だった。ひとつ、ぐずれかけた地層から空洞の入り口が見える事を除いては。

「「Jの先からですかね？」とにかく入らないことにはわかりませんが・」

研究者がそういうと博士。楠木は歩みだす。

「わたしが先にいく。皆は政府を待ちつつ、機材の準備をしておいてくれ。すぐ戻る」

「しかし、まだなにがあるかもわからぬ所に、危険です！政府が来るのを待つほうがいいのでつ」

研究者の言葉をどぎるようすに楠木は語りだす。

「お前は研究者か？ いまだ観ぬこの未知なる力に興奮しないのか？ わたしは無理だ！ 40年ほどの研究人生はこのときのためにあると信じわたしは歩んでいく」

そう楠木はいうと、もう振り返る事はせずその空洞へ一步一歩、歩いていく。未知なる力へ 未知なる場所へ。だが恐れない あるのは研究者としての誇りと好奇心

中に入るとそこは無。なにもない道が広がっていた。ライトをつけ歩いていく。5分、10分が経つたであろうときにひとつものを楠木は見つける。

「これが正体なのか。・・・なんだ。数値がおかしい！ こいつが原因か。」 小型機材の反応を見て彼は笑っていた。子供が玩具をみつけたときのような無邪気な笑顔のように。

謎の力をだしているもの。それはふるびた箱だった。2メートルほどの高さの箱の中心には9つの鍵穴がある。だが鍵はついておらず、まわりにはなにもない。

箱には扉がついていたが、開けることはできなかつた。鍵がなければ開くことはないんだろうと楠木は考える。

「戻ろう。戻つてはやく研究しなければ！ 最大の発見だ！ この箱の中にはなにがあるんだ！！ はやく・・・はやく解き明かしたい」 興奮を抑えようとしない楠木は走り出していた。来た道を、来る時の速さの倍以上の速さで。楠木は思った。こんな全力疾走はいつ以来なんだろうと。まだこんな力があつたのかど。

入り口付近に戻ると政府関係者および警備体制を練る警察官数十人が集まっていた。

「博士！ご無事でなりよりです。なにか原因となるものはみつかりましたか？」研究者が告げると、とてもうれしそうに楠木は語りだす。

「ああいすぐに研究しなくてはならない物があつた！これは大発見になるぞ！その歴史をわれわれが作ると考えると興奮が收まらない！すぐに運び出す準備をするのだ！」

研究者達も今までみたことがない顔で興奮している楠木みて、ことの重大さに気づく。とんでもない物がこの先にあるという事実。それゆえの危険な物という事実に。

研究者達が、作業にとりかかり関係者に指示をしていところ、楠木は政府関係者あかほしょくしゃ赤星称矢あかほしょくやと会話をしていた。

「あなたが楠木博士ですか。はじめて総理から現場の指揮をまかせられています赤星です。とわいつても素人。博士たちの要望に答えるようにいわれています。」

楠木の第一印象は、身長は自分より10センチほど高い180cmの長身にサラサラな髪をして紳士な印象を漂わせながら、作り笑いともとれるその笑顔を信じることはできないというのが

印象だった。「ああそれわ助かるよ。まずはあの箱を研究所へもつていくのが一番じゃ。あとは私たちが研究した結果を待つてくれるだけでいい」

そう告げると赤星は、その作り笑いともとれる笑顔で、ええとう上にも伝えておきます とだけ言い残し、電話をかけ始めるとともにその場をあとにした。

楠木はこのときから赤星を警戒していた。政府の人間ということはもちろんだが、彼がだす独特の雰囲気に研究者である自分がだした答えは信用しないほうがいいという判断だった。

ただこのときの彼は興奮していた。未知なる研究材料を見つけたこと、それを研究したいがための焦りをもちあわせていた楠木はその

警戒心を高めることはなく内に留めてしまった。

自分のすべてをあの箱に捧げる準備をするために考えをやめてしまつた。その結果がどうでるかは、誰も知らない。

### 同時刻とある山奥周辺。

彼には使命があつた。父からの使命が。それは箱が眠る場所を監視すること。それに危害を加える者がいた場合の対処の仕方など。ただ彼・・・望月俊介もちづきしゅんすけは過ちを犯してしまつた。まずその使命を知つたのは父が亡くなる直前のおよそ半年前の出来事だつた。

望月の父は病に倒れてしまつた。そう長くはない命と言われ、覚悟はできていたらう俊介はできるかぎりのことをしようとしていた。ある日、父が俊介に打ち明けた秘密により人生は変わる。「俊介、私は長くない。死ぬ前に私の使命をお前に託す」

信じられるはずのない話を父はし始めた。眠る箱には未知なる力が込められているという。その箱を開けるには鍵が9つ必要という。その鍵は現在、守護者といわれる人物達がなにげなくもつていると言つこと。その一つは自分がもつてているということ。その鍵には不可思議な力があるということ。

ボケたのかと疑うほど内容だった。ただ父の目は真剣で、だけど信じられるはずもなかつた。ただ父がだした鍵をみせられたとき思いは変わる。

金色に輝く鍵は、ネジ巻き式のおもちゃの「うしろひつ」というような鍵の形をしていた。見る感じ普通の鍵。一つ違つことは不思議な力があるということだけ。

おもむろに取り出した鍵を自分にむけた父は、「これから起きることは偽りの世界。忘れるなよ」そう父は言つと、手にもつた鍵を扉をあけるように回した。

なんなんだいつたい?今日の父はおかしい・・・そう思つていた矢先、父がいきなり血を吐き出した!えつなんなんだよいつたい!!  
おい親父!!

ナースコールを押しても誰もこない。叫んでいるのにだれもこない。血を吐いた父の体は動かないままだった。自分はどうすればいいんだ？ そう思いながらも叫ぶことしかできない自分。

なんでだれもこないんだよっ！ 「死ぬんじゃねえぞ！ おいつ！」 叫ぶと同時に・・・突然真っ暗になつた。「えつ・・・」思わず声を

だす。なんだこれ・・・？

なんだこれ・・・ビードよーーーー！ あれ体が動かない・・・違うない！ 体がない・・・。

分かるのは暗闇ということだけ。考えることはできるのこいつも動かせる体がない。存在しているのは考えることと、暗闇の中ということだけ。

何が起きたのかもわからない。冷静になつていいくほどに湧き上がる恐怖。今まで感じた事のないほどの恐怖。おかしくなりそうだ・・・俊介が精神を保てなくなりそうな時、光が入つて来た。

ハツと気づいたときには、ベットで鍵を持ちながら、まつすぐ見つめている父の姿だった。戻った・・・ここは病院だ！ セッキのはいつたい・・・

「どうだ？ おそろしいだろ？ これがこの鍵の力。今までお前が感じて、見てきたものはこの鍵が作り出した幻想。この3番目の鍵は、幻術をかけることができる鍵なんだ」

理解したくない話だつた。でもするしかなかつたと言つたほうがいいのかもしれない。自分で感じてしまつた恐怖と真実に逆らう気持ちは持てなかつた。

「それをなんでおれに・・・」嘆く自分に父が言い放つた言葉は單純なものだつた。それゆえの重さを持ち合わせながら。

「使命を果たせ。私の使命をお前がを果たせ。これから伝える」とを受け止め、私がしてきたことを引き継いでいってほしい・・・」

そう告げた後、1週間後に父は亡くなつた。64年で閉じた生涯は満足だつたんだろうか。父は使命を全うしていだ。父の書斎をみて俊介は確信した。

父から譲り受けた第3の鍵以外の8つの鍵を保持する者の詳細が書かれたノート。入院してからここには来てないはずなので、入院する前のいつ書いた詳細なのかは、わからなかつた。

なぜ彼らの詳細を知っているのか？これを見るかぎり各地に散らばる者達を1人で纏め上げられるわけがない。いるんだ・・・父に協力していた者が。

その後、書斎をいろいろ調べてみたものの、協力者の詳細は分からなかつた。結局、俊介に残されたのは鍵1つとほかの保持者達の詳細がかかれたノートだけ。

会いに行こうかとも考えた。保持者たちに会いに行き、すべてを問い合わせ出したかった。だが彼はやめてしまう。欲望に負けたというべきなんだろうか。自らがもつ鍵の力を間違つたほうへ導いてしまつた。

幻術。自ら味わつてしまつたその力に俊介は甘えた。考えついたことは単純なことだった。これを使えば楽に過ごして行けるんだ。

父と二人暮らししだつた俊介を止める者はいなかつた。止めようがなかつたのかもしれない。俊介には相談する人たちがないことがなりにより致命的だつた。

ただ1人で、自分のためだけに考えてしまうことを、そう追い込んだのは自分。

そして彼は変わつた。関わる人々に鍵の力を使い始め、ためらいもなく使い続けることにより過信してしまつた。世界は自分の思い道理になるんじやないか！

そうしていくうちに父から託された使命を忘れ溺れてしまう。結果それが間違いだつた、使命を放棄したことにより自らの首を絞め、そして現在に至る。

「ヤバイ・・・早く逃げなきゃ・・・」俊介は焦つていた。目覚めたときにはすでに遅かつた。箱が眠るとされる場所からすぐ近くにある家に彼は向かつていた。

家を空けて約一週間ぶりに戻つた俊介がみたのは箱がある場所に群

がる白い服を着た人々や、警察、スーツを着こなす人々の群れ。

俊介は気づく。見つかったんだ……箱が見つかったんだ……逃げなきやいますぐ逃げなきや。

ただ彼は家に向かう。絶対にもつていかなきやならない物があるから。詳細がかかったノート。そして己を狂わした鍵。

「くそつ・・・いつもは持ち歩くのにこんなときにはいいいい！！！」

「！」過ち。流れに任せ遊び、無責任に放置してしまった罰。それがいま重大に圧し掛かる。

「鍵だ！鍵だけでもいい。持つて逃げよう！鍵だ！あれは俺の鍵だ！！！」息を乱し、一目散に家に入った。

鍵は持つた。あとはノートだ。もしものためだもつていかなきや。

くそつなんでねーんだよつどこだよおい・・・

重要なことが書かれているノート。ただ俊介は鍵にだけ執着してしまった。それゆえにノートのことを考えたのはいつ以来なんだろうか・・・

焦る俊介をさらに焦らす事態が訪れる。インターフォンが鳴り響く。俊介は固まる。焦りと同じくらいの恐怖を感じながら俊介は考える。

「警察？」たしかに場所から近いこの家に気づくのはあたりまえだが、なんで今なんだよつ。・・・くそつ逃げなきや！ノートはもういいつ鍵さえあればどうにでも・・・

「裏から逃げよう」足早に裏窓に向かい、窓を開け逃げようとする。が、いつもみなれた景色とは違かつた。黒いスーツを着た人が2人そこにはいた。

さらに俊介は焦る。対峙してしまった彼らが迫る中、ドアをこじ開けはいつてくる人たちの足音に・・・そして俊介は手にする。不思議な不思議なその鍵の力を使うために・・・

ドアをこじ開けたスーツの男の後ろを歩く赤星は周りを見渡す。「誰もいないのか・・・」緊張の糸を解こうとした赤星にさらに張り詰めることとなる音が響き、聞こえた。

ドオン！銃声と思われる音がおくから聞こえてきた。ドアをこじ開けた赤星ともう1人の政府関係者は走り出す。音がした場所でみたのは無残な光景だった。

裏にまわっていた1人の男が倒れて、もう1人の男が呆然と座つていた。倒れている男は頭から血が滲みでていた。ダラダラとただ流れながら・・・

赤星が駆け寄る「どうしたんです？なにがあつたんですか？」冷静に黙々と赤星は座り込む男に話しかける。

「あなたはここに！君へきて！」走り出しながら指示する赤星の後を追いかけるように1人のスーツの男が走り出す。気が動転している彼は動けない。体験したことない状況をしてしまつたようだ。・・・

俊介は全力で走る。だれかが追つてきてる。ハアハアハア・・・はやく逃げなきや。ただ気持ちとは逆に俊介の体は鈍くなつていくばかりだ。

運動という運動をしない俊介の体はすでに限界だつた。久々に走ったこともそうだが、あふれ出す焦りと不安によつて心も体もひどく疲れていた。

あまりの痛さに叫ぶ俊介に近づいてきた2人の男。痛さに溺れる中

でこいつらに撃たれたのかと俊介は考えていた。

やつやがねこいにい…べれおじいある…じいあるんだよつ…痛さと不安に押し殺されそうな俊介は無意識に握っていた。この状況をすべて変えてしまつ鍵を。

詰め寄るスースの男にむかい、鍵を突き出す。さつきと同じだ。お前は後ろにいる人があらが一番恐れる魔物に成り代わつて見える！

赤星は離れて立っていた。撃つたのは赤星だ。ためらいもなく撃つた銃弾で倒れた男に仲間の1人が駆け寄った。

「なんだあの小さい物体・・？」赤星は男がもつ物に見入ってしまつた。なんでここでの者はあんなものを・・仲間の一人が後ろを向いた。みたこともない顔で。恐怖しかないという顔をさらけ出しながら。

冷静だつた。迷わず、ただ撃つた。仲間として行動していた男に向かつて1発の銃弾を。表情すら赤星は変えない。これが当たり前だ

つそんな顔でただただ冷静に。

倒れこむ仲間の後ろでなにかをもつ男がこちらにそのなにかをもつ腕ごと突き出した。瞬時、ためらうことなくせんたくを放つ。轟音と共に俊介の手と一緒に鍵が投げ出された。

そんな俊介をよそに赤星は1つの物を手にする。俊介の手と共に投げ出された鍵。見た目は普通の鍵。ただ手にすると変わる。その魅

力に。引き込まれるように見入ってしまった。

「かえせええ！それはおれのだああ！おれのもんだぞ！！かいしやがれええええ」すぐにでも鍵を取り返したかった。ただ足と手を

撃たれた彼はひれ伏しうめくことしかできなかつた。

「それほど大事な物なんですね。これを使ってなにをしました？私の部下を2人も殺したんです。話してもらいましょうか」

「1人はてめえが撃つたんだろうがああ！いいからかえせえてめえに話すことはねえんだよおおお！」痛みを堪えながら叫ぶことしかしない俊介を見て赤星は望みを捨てる。

「そりですか。残念ですね。なら実験だけでもお手伝いを」そうい  
うと彼は鍵を彼に向かた。「こんな感じでしたつけ?」やきほぢみ  
た光景を思い出しながら彼はさらに話し出す。

「部下一人は化け物と叫ひながら銃を向けてきました、おかしいですねえ普段みなれた者にむかつて。私は部下に慕われてると思っていたんですけどねえ」

ふと心の中で考へる。どうしましようかねえ……化け物ねえ彼が化け物みるにはどうすればいいんでしよう化け物をみろつて言つてみましょうかねえ……

「そう心で思つた瞬間。突如倒れて叫んでいた俊介が怯えだす。「うつうつうううううううああああくるなあーくるんじやねえええええ」

心からの笑顔  
で。

「 そりですか。なるほどね。考へるだけでいいんですね。鍵は向ける必要はあるんでしょうかねえ。試して見ましょう」 鍵をおろし念じる。そりですねえ・・・田が見えなくなれって感じでいいですかね。

「ハアハアハア おいでこだよおおたすけてれくれー ああああ」叫ぶ  
声も小さく、憔悴してきた俊介を、笑いながら赤星はみていた。二

ヤニヤと悪魔のように。そして告げる。やさしそうな言葉を。

「わかりました。いま助けてますよ。ありがとうございます。」

「彼はまたためらいもなく撃つた。小さな虫を殺すように。撃ち終わつた後には顔に笑顔を浮かべながら・・・

「さて・・・・人を殺した後とは思えないほど冷静に、冷酷といふ言葉が似合うほどの美しさを漂わせながら彼は携帯を取り出した。

「赤星です。箱に関係ありそうな物を手にいれました。・・・はい、いまから戻ります。」電話を終えた赤星の顔は、美しい笑顔で・・・

「次はまだ1人いましたね。後始末は大事ですからね。」そういうとさきほどの家に向かつて言った。そして1発の銃声が鳴り響き。

1つの生命が消えた。

それから半日が立つたころ、官邸のある部屋で、議論する者たちがいた。その中で絶対的な決定権をもつ者、内閣総理大臣定本国治は淡々と話を聞き、口を開く。

「それが鍵か。普通の鍵に見えるが。箱を開けるために必要とすれば、十分な発見だな。死者がでたのはまずいが、やむ終えん。」

「総理、鍵はわれわれで保管していたほうが良いのでは?ちゃんと

した場所に管理しとおけばなくなる心配もないはずですし。」

定本総理と赤星以外に部屋には5人の男たちが集まっていた。表では人気のある内閣の面々。欲望が渦巻く部屋で自身の意見を出し合

う。

「私も賛成です。未知なる鍵。調べるのもよろしいかと」また1人意見を言つ。定本は窓の外を見ながら聞いていが、おもむろに口を開く。

「赤星、お前はどう思う?」内閣の面々ではなく、側近としている赤星に定本は問う。ほかの5人は顔からでる嫌気を隠すことはしない。

それでも赤星は動じない。いつもと同じように、笑顔を見せながら

定本の問い合わせをだす。

「そうですね。みなさんと同じ意見です。開けるためだけの鍵ですし、保管するほうがいいでしょうね。後の事は私に。ノートに書かれていた人物たちをあたり、鍵を集めてきます」「

「ふむ。そうか。なら鍵は研究所で調べたのち保管する。赤星は調査へいけ。誰か鍵を研究所へ。」そう告げると定本は部屋をでていった。

「赤星。鍵を渡せ。私がもつてこい」「1人の男が告げる。みなが赤星を注目している。

「はい。よろしくお願ひします。」そう言い、赤星は鍵を渡し、笑みを浮かぶ。がその中は黒く・・・深い闇に満ちた表情を隠しながら。

「側近は総理のお守りをしていればいいんだ。ニヤニヤ笑いながらおれらと対等に話すんじゃねえぞ」その言葉は凶器のように、鋭く赤星に突き刺すように投げかける。

「気をつけます。ですが総理からまかせられた件ですので。この件は私が担当し、私がすべてを指揮します。不満があるなら総理へ申し出でください。失礼しますね。」

そう告げ部屋を出た赤星は彼らに背を向け歩みだす。その顔は笑顔ではない。無表情。話す価値もない、生きている価値さえないものを見たような顔で。

ただ赤星は鍵を預けた。普通の鍵を。不思議な能力もなければ、箱を開ける鍵の1つでもない。普通の鍵を彼らに渡した。研究したつて結論はでている。変哲もないただの鍵だということ。

本物の鍵は赤星が首に下げていた。これは私の物。私がうまく使えば、きっといい方向へ向かうんです。私は誰をも支配してみせますよ。それまでは何事にも耐えましょう。

鍵の力は幻術だけではないのかもしない。独占力。人をひきつける圧倒的な存在感は、持つ者を変える。望月俊介。彼もそうであつたように。赤星も鍵の魅力を感じていた。

「まずはノートに書かれた人物を1人、1人、当たりますか。佐治君に協力してもらいましょうかね。人数は少なく行動したほうが、後始末も楽ですねえ。」

赤星は誰も信じない。ゆえに心も閉ざす。それでも総理に信用される理由は誰も信じない、誰にも心を開かないことにより、情に流されず事を述べること。冷静に判断すること。

「佐治君には近い場所からですかね。久保田総一郎。彼のとこへいつてもらいましょう。このノートどこまで信じられるかですがね。」動きだす。政府という力と鍵の力を持ち合わせた悪魔が・

赤星が企みを膨らましてるころ。東京とある高校で1人の男が退屈そうに外をみていた。

ああ～つまんねえ～。いつも退屈だと逆にいろいろ考えちゃうんだよな～。なんで学校にいるんだろう？なんで授業を受けなきゃいけないんだろう？なんで俺はここで退屈そうにしているんだろう？ちいせえ～おれちいせえーな～。なんにも成し遂げてない。おれはこの先もこんな感じなんかなー。ああやべえ不安しか思い浮かばねえ・・・

少年は日々考える。そして落ち込む。ネガティブになりがちな少年は目標がない。夢を持つこともない。それじゃダメだと心の中で思えるのに少年は結局なにも変えられない。

少年、沖田慶介おきだけいすけは高校3年生だ。高校最後の夏だ。思い出作りも、これからのこと、いろいろ決める時期。人生で重要な時期だが沖田は焦らない。

今日もこづしてネガティブに考え込んでいるここに声が掛けられる。

「沖田くん。授業中です。集中してくださいね」眼鏡をかけたベテラン風な教師がやさしく沖田に声を掛ける。教師もなれたような言いようだ。普段から沖田はこんな感じだった。

「ほーい。わかりましたー。」グダグダと語り、見せ掛けのようないい教科書を開きながら沖田は全身から退屈オーラを出し続ける。

そんな沖田を後ろから見ている女子生徒が、グーパンチをお見舞いする。「いてつ」小さく叫んでしまった沖田だが、驚きはしなかつた。いつものことのように振り返る。

「あれだよあれ。咲はかる―――く殴つてるかもしれないけど、なかなか痛いんだぜ！体の芯にまで来るような痛さってやつ」仲のいい友人に話しかけるように沖田は後ろの席の女性、じまちあき小町咲に投げかける。「私が殴らないとけーちゃんまじめに受けないでしょ。私に感謝しないとね。ほーらさつさと前向いてマジメにしてください。」咲はいつものようにいじわるそうな笑顔の中で

慶介を心配していた。中学校から友人として毎日のようにつるんでいたメンバーの中で慶介は時に楽しく場を和ませるが、時折みせる希望もなくただ生きているだけのような雰囲気を課持ち出す、不安定に表情や、雰囲気を変える慶介を咲は心配していた。それと同時に淡い恋心を抱きながら。

「へいへい。」前を向く彼の背中を見つめてしまつている自分がいる。いつからだつたか芽生えた感情に咲は戸惑っていた。

「そーとそばにいすぎたのかなー？」いつのまにかスキになっちゃつたー・・・困つたなー困つたなー。皐月にはバレバレって言われちゃつたもんなー。けーちゃん気づいてるんかな・・・

咲もまた葛藤する。青春の時期。誰もが経験する恋。親友になつてしまつた同級生をスキになつてしまつた現実に向き合つことができなかつた。

チラつとドア側の席を見るとニヤニヤと笑つてゐる親友がいた。お大鳥皐月。おとりさつき慶介や咲や仲良し5人組の1人にして咲の理解者で、恋の相談相手。

「バカツ！」ジェスチャーを交えながら皐月にメッセージを送る。バレバレなのかー！バレバレなのか私・・・。

前の席では人生に悩む少年。後ろの席ではその悩む少年に恋をした少女が悩む。さらに2人は、表情や行動でそれを表してゐるため、回りからみれば、えつ2人なんかあつたの・・・？喧嘩かな？など

いろいろな思いが交差しまくっている状態だ。

そんな2人を見つめる皐月はさらに笑ってしまう。「似たもの同士なんだけどなー」

どうにかして2人くつ付けたいけど、これはこれでおもしろい・・・ダメダメ。親友のためだ！私が一肌脱ぎましょ！

大鳥皐月。世話好き。誰かの恋愛を見てサポートするのが一番の趣味。それを見ているのが好き。

1人でなにかしら決意を固めた皐月に気づかず葛藤する2人。5人組のあと2人はというと違うクラスで、1人は暴走する少年柳生真一。1人はまじめな優等生で勉強する柊孝之。まるつきり性格が違う彼ら、だが彼らは親友という絆でつながっていた。

その絆が悪い方向へ傾きつつある。1人が物語りに巻き込まれたことによつて起こる連鎖に親友達も巻き込まれる。運命を共にし、先の見えない未来へ一步ずつ・・・

キーンコーンカーンコーン チャイムと同時に学校からぞくぞくと帰宅する学生で群がる。慶介も足早に学校から帰宅しようとしているところだ。そんな彼に声が掛かる。

「慶介！赤星みなかつた？」眼鏡を掛け優等生感をかもちだす柊孝之は、5人の中とゆうより学校の中でも上位に入るほど頭が良い。先生方の評価も悪くなく、だれが見ても優等生つと捕らえるに十分だった。

「いんやつ今日はみなかつたかなそいいえば」考えることに飽きてまあついいかなんとかなるつといつもどうりに自分に言い聞かせてダラダラしている慶介とシャキッとした表情をし一緒に歩く柊。正反対だからこそお互いに分かりあえるものがあった。

そして仲良くなり青春時代を共に過ごしている。「最近はまつてるとて言つてたボクシングジムいつたんじやないのかな？」後ろから割つて入つてくる咲の声に2人は共感する。咲と共にた皐月も同じだった。

「ああなるほどな。あいつがあんな続けられるとはなあ。いいことだ

あいいことだあ」霸氣を感じない声でしゃべり続ける慶介を咲は直視できずにいた。それをみて憂い憂いしいなあ～もつと一やついてしまう皐月はさきほどの決意を実行に移すことにする。

「おーい慶介。この後なんかあるのかい？」突然この後のことを見

く皐月に、慶介は「ん？まあ別に。家に帰ろうとしてた感じかな。

なになに？おもしろいことあるの？」ダラダラモードを解除して興味深々に皐月の返事を待つ。

食いついた―――――！心中で小さくガツツポーズする皐月は咲に田をやる。咲はどうとん？つとなぜにちらをみながらニヤニヤしているんだろう？つと考えていた。

「実はね！映画のチケットもらっちゃってさあ2枚あるんだよねえ！（休み時間にコンビニで買ってきたんだけどね）私これから用事あるからさあ咲と2人でいっておいでよ！」

エエエエエエエエエ！心中で叫ぶ。いきなり投下された爆弾に咲は動搖していた。「えっちょっとどうしたのいきなり！」オドオドする咲に小声で「キュー・ピットってやつにならうかなつて思つてね！ウフフ」咲も精一杯の小声で叫ぶ「も~~~~~！」

そんな2人のコソコソ話をよそに慶介は「おついいかもね。でも終どするん？」当然と言える発言を投げかけた。それに動じることをせず一瞬の閃きで皐月は「ひーちゃんはこのあと塾つて言つてたもんねえー！」言葉を発すると同時に柊に向ける。

THE優等生は雰囲気を読むのもうまかつた。その雰囲気を察した柊は「そうなんだよ！ごめんね！だから一人でいっておいでよ！」

「そつか！じゃ早いとここいつちやお！咲いくぞー！」気分よく歩きだす慶介に咲もオドオドとついていく。後ろからみれば普通の仲良さそうな男女だ。

「いやあ～さすがひーちゃん！100点満点だね！」ポンポンと柳生の肩をたたきながら皐月は柊に感謝していた。

「咲ちゃんがんばってほしいねえ。皐月ちゃんもHライヨーナイス

アシストだね！」2人は笑つた。心からの笑顔で。慶介と咲がいい感じになるように祈りながら2人は各自の家へ帰つていつた。そして時は進み。

全然集中できなかつた・・・

咲は嘆いていた。2人で映画をみるのははじめてだった。5人で映画を見たりしたことはあるし、慶介の隣の席でみたこともあつた。けれど2人きりという独特な雰囲気に完全にのつとられてしまつた。黙々と映画を見る慶介をチラツとみてしまう私がいて。見惚れてしまう私がいて。気がついたら映画は終わつていて・・・映画の内容はあんまり残つてなかつた。一番残つているのは俊介の横顔でいて。。。

いまこうして一緒に歩いて帰宅している時も俊介の横顔は見える。映画館でみた横顔とはまた違う横顔だつた。その顔に咲は安堵していた。

「元気でたんだ・・・よかつた」ボソッと本音がでてしまつた。「えつなんかいつた？」覗き込んで迫つてくる顔に咲は過剰なまでに反応してしまつた。

「えつなんでもないよつ！アハハッ。」やばい私いま絶対顔赤いよおー！もう隠せなくなつて来てるよねこれ。。。一緒にいるだけでキドキしちゃつてるんだもんね。決心しなきや・・・そうだよね・・・いけ！いくんだ私っ！

「あのねけーちゃん話がつ」決意を固め、自分の気持ちを伝えようとした可憐な少女の目に老人が倒れこんでいる姿がはいつてきた。

「大丈夫ですかっ！」いち早く発見していた慶介が走り出し老人に駆け寄る。咲の言葉は聞こえてないようだつたが、咲も今はそれどころじやないと一緒に老人のもとへ駆け寄つていつた。

「もしもし聞こえますか？大丈夫ですか？」慶介の問いかけに老人はじつと慶介の目をみていた。

「ハハツ・・すこし体を動かしたものでね。もう年だねえ70年目の全力疾走は体に堪えるよ。」自力で起き上がるうとする老人に2

人は手をさしのべ手助けをした。

なんだつたんだろうずつと見られたけど・・・てかつ70歳かよつ

！心で関心している慶介とは違い、

「あの・・どうかされたんですか？」咲が老人やさしくこの状況になつた原因を聞くと老人が語りだす。

「これも運命なのかの。私が請け負つた運命を偶然通りかかった君に託すこと自体がすべて決まつっていたかのようでね。」突然語りだす老人の言葉の意味が2人は分からなかつたのでキヨトンとしてしまつっていた。

「いやじいさんとりあえず家まで送るから。場所おしえてよつ」ボケたのかこのじいさんと思い早めの行動にでた慶介に向かい老人は、「家かあ。あそこはもうダメだの。突然見知らぬ男がきたと思つたら押さえつけようとしたもんでの。慌てて逃げてきたんじやよ。」平然ととつもないことを語りだす老人に2人は言葉にできなかつた。

おいおいそれ大事だろ。犯罪にでも巻き込まれたのかこのおっさん。てか逃げるつてすげえな。こんな息あがつちまつてる70歳だろ。どんな裏技だよ・・・

心中で状況を整理しようと黙り考えている俊介と咲にむかつてなおも老人は語る。

「40年ほど守つてきたがの。誰に託そうかと思っていたがなかなかこれじやよ。残酷なもんだねえ。私が死ぬまでそつとしておいてほしかつたわ。」

「わしゃもうすぐ死ぬ。ただもつてるだけと思つていたがなかなかこの使命はたやすくないもんじやの。その使命君に託そうかと思うんじやがどうかね少年。受け入れる覚悟はあるかいな？」

ふつととりだした変哲もない鍵を差し出しながら老人は慶介に問いただす。慶介はまったく理解できず、ただその鍵に目が言つてしまつていた。

託すつてこの鍵をつてか？使命つてなんだよーてか死ぬつて。あ～

また悩みだしてとまらねえー。理解できない状況の中でぐちゃぐちやになつた頭をフル回転しはじめた慶介。

「ちょっと待つて！その鍵つてなに？金庫とかの？守ってきたって強盗かなにから？」思い立つたことを言葉にして老人へ投げ込む「誰からだろうねえ。わしも襲われたのは初めてでねえ。確実なことは動き出したんじやよ。運命がね。私の運命も。少年！君の運命もね。」

おいおいなにいつてんだ・・・シカトして帰つちやあつかな・・・退屈ではないがめんどくさいオーラがこみ上げてきた慶介のことを無視するよう老人の話は止まらない。

「老人の頼みじや。聞いてくれんかの。そつなればわしも楽になるんじやがの。」

「あの・・・私が預かりましょつか？」オドオドと話を聞いていた咲が老提案をするが、老人は爆弾を打ち込む。

「君じやいかん。命を掛けなきやこれは守りきれんし、この先も大変になる。」

「えつ・・・どういふことなのかな・・・からかわれてるだけなの？全然わかんない。どうしよう・・・

「おっさん！悪いけど先いくわ！ナイスなボケだつたぜ！気をつけ家に帰つてな。」そういうと慶介は咲の手を掴み、そのとき咲はポワッと赤く顔を染めたがそれにはきずかず足早に立ち去ろうとした。

直後老人が、さきほどまで倒れていた老人とは思えない動きで慶介と咲の前に移動した。そう2人の上、空中をトーンと回転しながら飛び体操選手のようにスタッツと着地をして。

「え・・・」2人同時にでてしまった。目の前で起きたことに啞然としてでてしまった。飛んだ？誰が？老人が？どこを？おれらの上を？どうやって？

今まで以上に頭が混乱している2人に向かい老人はスタッタと歩みよる。

「ハアハア・・・。いまのでもう疲れがでてしまつわい。ビ「ひじやビツクリしたじやろ? ほしくないかい? この力。命を掛けるなら君に託すがのぉ」

そういうながら先ほどみた鍵を慶介に向かい差し出した。

「この鍵がいまのようなことをできるようにしてくれたつてこと?」冷静に慶介は聞いていた。目の前で見たことにたいしての率直な疑問をその行動をした老人に率直に聞いていた。好奇心がすべてだつた。

「九番の鍵じやよ。こんな老人でも肉体を強化すればいまのようになできてしまうのじや。転んだ時のかすり傷もすぐ直るしのぉ。限界を突破したくないかい? 少年。この先の未来変えて見てはどうかの?」

「未来・・・おれの未来か・・・」おっさんに関わらない人生をとるか関わる人生をとるかあー・・・命か。よくわかんねえけどまつあとから考えればいいか―――

「いいよつーその話ノッた!..」ドンッという効果音が似合つほど勢によくビシッと発する声に驚いた咲だが即座に言い返す。

「ちよつとーけーちゃん! よく・・・よくわからない話なんだかもつと考えてよ。」心配100%の表情と言葉で慶介を諭すが慶介の顔にはウキウキ100%の顔が浮かび上がつていた。

「必要とされたんだよ俺が! ならそれに答えるように行動しないとさ! 退屈な人生から抜け出せるかもしれないだろ?」

「ちよつとー退屈とかそういうことじやないんだつてばーもう・・・すこしあはマジメに。・。・」

心から心配する咲の顔をみた慶介は黙つてしまつ。はじめてみた咲の顔に、自分をこんなにも心配するんだといつ咲に、慶介はすこし見惚れてしまつていた。

「この先、いろいろなことが起きるじやんつ。それに逃げず立ち向かうこと誓えるかのぉ?」今まで見せていた目とは違う。力が籠った目でみつめられた慶介は戸惑うことしなかつた。

「誓つよ。なにがあるのか知らないけど、誓える！」

「ファッハハハ。そうかそうか。なら授けるぞ。わしの使命。受け取りなさい。」9番と数字が掛けられた鍵が老人の手から慶介に渡つた。

「うおっ・・・おお・・・」すぐえへ・・・見た目普通なのに持つと違う。感じる・・・引き込まれそうだなんかな・・・「鍵に負けないようにな。見せびらかすのもよくない。首にさげときなされ。」

「おっ・・・おう!」

生きているかのように存在感をだす鍵。その鍵には力があった。不可思議な力。人生を変える力。

「ではこれでお別れだの。巻き込んでしまつてすまんかったの。だが少年、君なら大丈夫じや。さあ行きなさい。」老人は笑つていた。やさしく微笑むように。

「追われてるんだろ？一緒に行こうぜ。なんかやばそうじやん！」  
「ハハハッ。わしが一緒に行つたら鍵を渡した意味がなかろう。大丈夫じや。鍵もない老人になにもせんじやろ。これからることは・・・

・そうじやな。玲子さんとこへ行きなさい。場所は・・・」

会話の最中に3人は路地から歩いてでてきたスーツ姿の男達を確認

した。まだこちらには気づいていないようだ。

「おでましじやのお。場所はいまのとこじや。さあ行きなさい。わしは信じているぞ。君の運命がすべてを包みこみすべてを解決してくれるこことを。」

「えつおじいさんも一緒に行きましょう。さあ」咲が心配している声で老人に告げるが老人は動かず2人へはやく行きなさい。といふだけであった。

気づかないでいた3人のスーツの男達もこちらに気づいたのか いつたつと声を張り上げこちらへ走つてくる。

「行くのじや。また会おうの。行け！」迫力ある声で2人へ投げかけるその言葉に慶介は咲の手を掴み走り出す。振り返ることはせ

ずただひたすら前へ前へ突き進んだ。

その2人が過ぎ去るのを眺めていた老人にスース姿の男達はつめよ  
り激しく言葉を掛ける。

「さっきの子供は誰だ？なにを話していた！」攻撃的に老人へ言葉  
をかけるが老人は動じず、ゆっくりとそばにあつたベンチへ腰掛け  
る。

「さてなんのことじやろつなあ。さて君たちは私になにか用かね？」  
イライラしたした男達に向かつて、じっくりとマイペースに会話を  
進めていく老人に完全に男達はペースを握られていた。

「鍵？さてなんのことじやろうなあ。わしゃ知らんのあ。すまない  
ねえほかをあたつてくれたまえ。」何食わぬ顔でそう告げると立ち  
上がりよぼよぼと歩き出す。

「おいまたえコラーとぼけてんじやねえぞ！」こつちは情報掴んでき  
てんだよ！」

「ハハハツ。君たちは偽の情報に踊らされてしまつたんじやないの  
かい？あまり老人にむかつて叫ぶのも良くないよ。ほら待ち行く親  
切な人々がこちらへ目を向けておるぞ？」

老人に向かつて数人の男達が詰め寄つている場面に遭遇した人々は、  
心配そうに老人へ目を向けていた。数人かは携帯電話を手でもちい  
まにも警察へ連絡しようかとしていた。

「くそつ・・・いつたん戻るぞ。警察はやつかいだ。」そういうと  
男達は足早にその場を去つていった。残された老人に数人が駆け寄  
り、やさしく言葉を掛けってくれていた。

「警察とは違うのかの。やつかいなことじや。すまんが少年後は  
頼んじやぞ。」姿はもう見えない。だが目にやきついている少年の  
顔を思い浮かべながら老人は、感謝と罪悪感を持ち合わせながらも  
期待を胸に歩いていった。

久保田総一郎宅付近

ひとりの男の電話が鳴る。

「そうか・・・久保田が一人になつたとこを取り押さえろ慎重にだ。

へたなことはするな。老人は丁重にしろ。学生・・・また情報が入り次第連絡をしてくれ。」

会話を終えた男は考えこむ。

ノートは信用できるのか？家にはなにもなかつたしな。老人しか住んでないとなると・・・。次を当たるか・・・

携帯を取り出し電話を掛ける。

「佐治です。久保田の家には特になにもありません。久保田本人とは接觸したものの逃げられていま監視中と連絡が・・・はい・・・では私はそちらへ向かいます。はいわかりました。先にむかつてます。」

佐治は電話をポケットへしまうと車に乗り込んだ。次に指示された場所へ車を走らせるために。

「佐上玲子か。細かい場所は特定してないんじや聞き込むしかないな。」車は走り出す。

佐治康弘。赤星の部下にして物語に巻き込まれた男。尊敬する赤星に指示され任務をこなす。発見された箱に関わる重要な鍵をもつ者のところへいき、鍵、情報を集めること。

政府での仕事のため警察に関わらぬようにとのこと。重大な任務。佐治は正義感が強い。自分にまかされた任務を全うすること。それだけを考えて佐治は行動する。赤星の闇の心を知らぬままに。

「ハアハアハア・・・ちかれたー・・・」後ろを振り向き追つてきてないことを確認し安堵する慶介だが、咲の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ハア・・・ハア・・・おじいさん大丈夫かな・・・やっぱり心配だよ。」

「大丈夫だつて。あのじいさんなら。行けって言つたんだあのじいさんわ。自分よりもおれらを逃がしてくれたんだから。いまはおしゃてくれた場所に行かないといじいさんのために。」

「うん・・・返事はしたもの、表情は変わらず心配そうにして

いた。それでも慶介は先に進むことにした。あのじいさんが狙われたように・・・いまから会いにいく人物も狙われているかも知れないという思いがあつたからだ。

「佐上玲子さんか。とにかく行かなきゃ。咲はどうする？」

「えつ・・・なんで?なんでそんなこと聞くの・・・」泣きそつな顔になる咲に、とまどう慶介は言葉はすぐでてこなかつた。

「・・・なんでつて・・・もしかしたらあぶないかもしれないから・・・その・・・おれ一人で行つたほうがいいかなつ・・・」

「ばか!」慶介の言葉を遮るように叫んだ咲に慶介は驚いてしまつた。初めて見る咲の顔に・・・はじめてみる悲しそうな涙を流す咲に。

「あぶないから帰つたほうがいいって?じゃけーちゃんは?わたしはけーちゃん1人を行かせたくないの!心配なんだよ・・・そばで・・・そばにいたいのに・・・」

言葉がでにくくなるほど咲は泣いていた。

なんで・・・こんなに泣いてるんだろう・・・おれのために泣いてるよね・・・なんなんだよ・・・わかんねーよ。。。

その思いを慶介は留めておくことはせず言葉にして咲へ思いをぶつけた。一歩一歩お互いに近づくように。

「なんで泣くんだよ・・・おれも咲が心配だから・・・だから俺1人で行こうって思ったから」

「心配だからそばにいたくないの・・・?それは足手まといだからそう言つてるんじゃないの?わたしは違うよ」

涙を流しながらもまつすぐと慶介を見つめるその目は嘘偽りのない純粋な思いだけが募つていた。

「好きだから・・・好きな人が心配だからそばにいたいの・・・」初めてだった。女性に真剣な目で好きと言われることが。いつも一緒に笑つてふざけあつてた人から。うれしい・・・わからない・・・わかんねえよ。

「いまそれ言わされたら・・・その、どうしたらいいかわかんねえよ。

怒つて泣いてそして告白されて、数分で濃密すぎる時間が流れた。  
そしてわずかにできた沈黙で2人は理解していく。はずかしながら  
も大切な時間だったことを。

「アレ・・・わたしの・・・やだ！ちょっと・・・もう一興奮し  
ててなんだかわかんないよお」

「なんだよそれクックツアハハハッダメだ笑っちゃうよ」

二転三転する雰囲気の中で結局2人は笑っていた。素直に心から。  
ぶつつけあつた気持ちを分かち合うために2人は笑った。

「ふう。あくまなんだその。。。返事は必ずするから・・・だから」

「いくよ。絶対いく。一緒にね。なにができることがあるかもしけ  
ないから」

決意。揺らぐことのない思い。言葉にすることによってさらに深ま  
った思い。それを投げかけられ、受け止めてしまった慶介は、咲と  
共に目的の場所へ歩みだしていった。

この先の未来に不安も期待も持ち合わせながらも歩くことは止めな  
い。戻ることもない立ち止まることはあるが、進むしかない未来に。  
1人の未来と、2人の未来を考えながら。

時同じころ・・・

千代田正信 27歳。彼は追われている。なぜ?持っているから。  
なにを?不思議な鍵を・・・

## まつめつの鐘（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。  
これからもよろしくおねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7150m/>

---

9つの鍵

2010年10月21日22時36分発行